

個人別態度構造の分析について

内藤 哲雄

About Analysis of Personal Attitude Construct

Tetsuo Naito

はじめに

筆者は、個への新しいアプローチとして「個人別態度構造」の分析技法を創案し、一連の研究を発表してきた（内藤，1991a, 1991b, 1992a, 1992b, 1992c）。これらの実験的成果を冊子にし、多くの研究者に意見を求めた。そして幾多の貴重な示唆や激励を得ることができた。また、筆者自身がこの技法について繰り返し説明し、研究者たちから手紙や口頭で助言を得る過程を通じ、この素朴な技法がさまざまな貢献をなし得るものであること、理論的にも大きな膨らみをもつものであることを確信することができた。そして技法と理論のいずれもが急速に展開し始め、今や創案者である筆者ですら全貌を記憶し、資料なしに説明することが困難となってきた。さらに、研究領域や課題が余りに膨大で、筆者が全てを単独で推進することが不可能であることも明かとなった。そこでとりあえず、これまでの成果や今後の研究の構想をまとめ備忘録とすること、多くの研究者が本技法やその理論を活用できるようにすることを目指した。しかしながら、研究開始から僅か2年にすぎず、現段階では学会発表のみである実証データを十分に整理して言及することができなかつた。実証的研究については、追って論文にまとめることにしたい。関心のある研究者は、当面は学会発表の資料を参考にしていきたい。

I 着想の経緯

筆者が「個人別態度構造の分析」を着想する発端は、かなり古いものである。それは、当時実験社会心理学を専攻していた16年前の大学院生の時に、一冊の本に出会ったことに始まる。その本とは、齋藤（1976）の「人間心理学序説：意識の科学への新しい道」である。その第四章に「認識論的二重操作による一実験」と題した、被験者1名の実験が紹介されていた。実験者は齋藤自身で、被験者は慶応義塾大学大学院博士課程の学生Nであった。そこでは価値に関する12の刺激語が書かれたカードが用意され、第1実験では2枚以上11枚以下を、第2実験では12枚全部を四角の無地の台紙に並べさせ、実験者に了解できるまで説明させるものであった。そのときの筆者の印象は、漠然と「人によって重要とされる刺激語の数や内容が違うのではないか」「その人の固有性に合わせた刺激語を用いて空間表示できないだろうか」と感じたのみであった。そのことがどこか心の奥底に引っかかった思いのまま、長い間

放置されていた。

その後も実験社会心理学を主専攻としていたが、ようやくにして信州大学医療技術短期大学部に「心理学」及び「臨床心理学」担当の専任となることができた。そこに在職中は、本当は実験社会心理学者であるが、職場の表看板が臨床心理学であるので、児童臨床の実務にもつき、臨床の講義をするのだと感じていた。いわば二足の草鞋を履き続ける意識の消えることがなかった。

ところが臨床心理学を担当しはじめて6年6カ月の後に、現在の職場である信州大学人文学部で元来の専門である「社会心理学」の講座を担当することになった。そのときから自身の中で不可解な感覚が生じるようになった。馴染みのあるはずの社会心理学のどの著書を読んでも、しっくりしないのである。どこか違うという印象が拭えないのである。それはどうやら、「個」が欠落しているという実感によるものであった。臨床の現場で、それぞれに独自の問題や個性をもつ子供たちを療育しようとし、親のカウンセリングを続けてきた後では、今日の社会心理学に納得ができなかった。抽象的・平均値的な人間は描けても、現実に生きている個人や集団の社会的行動を説明することができていないと痛感した。苛立ちや悲しみのようなものさを感じた。いつの間にか筆者自身の中で、臨床心理学と社会心理学が融合していたことに気づいた。

こうして、臨床においてカウンセリングが何ひとつ手に持たずに個別の現象や対象に肉薄するように、社会心理学でも個別の現象や対象に鋭く迫ることができないだろうか、と考えるようになった。しかも、技術の習得に時間がかかり、理論的視点や主観が関与しやすい従来の臨床心理学の方法とは異なった、操作的で客観的で簡便な技法を開発できないだろうかと感じた。卒然と「個人独自の態度構造」を捉えようとの思いが蘇った。臨床の実践においてそうであるように、被験者は1名でよいのだ、平均値も分散も必須要件ではないのだ、繰り返しデータはいらない。個人や単一集団の独自性や特有性、個のもつ豊饒を分析したい。しかも個々の要因分析ではなく、全体構造を捉えたい。これができれば、長期間にわたる従来のいわゆる事例研究法の呪縛から、個性記述的研究を解放できる。膨大な変数が総合的に関与する事例の、操作的・科学的な研究への道を切り開くことができる。そう感じた。何がなんでも技法を開発せずにはおられないという気持ちになった。

II 「個人別態度構造の分析」技法の概要

技法開発のポイントとしてまず頭に浮かんだのは、「自由連想」を利用することである。特定の対象に関する「刺激語」を提示し、投影法のように自由連想させる。これによってその人独自の態度を構成する素材を得ることができると考えた。次の課題は、いかにしてその人独自の構造を抽出するかである。

まず思いついたのは、連想項目間の関連度のプラス・マイナスの強さを評定させることである。この関連度の数値の行列を作成し、それぞれにほぼ対応すると思われる「疑似的な相関係数」の数値に変換してみる。これを相関係数とみなせば、因子分析が可能となる。ところが実際に解析を試みたところ、解がでないのである。数学的には行列の他の対からプラスの得点が推測される部分が、主観の現実世界ではマイナスということもあり得るからである

う。結果的にはこれが幸いした。平均値も分散も必要とせず、類似度の距離行列さえあれば分析できるクラスター分析に出会うことになったのである。しかも市販の統計ソフト「HALBAU」では、距離行列から直接に入力できる点でも簡便で有利であった（高木、中井、佐伯、1989）。そして疑似的な相関係数を用いた場合と尺度の各強度の段階を1とした場合とで比較したところ、析出されたデンドログラムにはほとんど違いがなかった。そこで後者を採用することにし、データの得点化と処理の問題が一挙に解消した。内藤（1991a）の「個人別態度構造の分析：過去・現在・将来での重要項目による」で、9段階の関連度を測定しているのは、上記の理由による。これに続く研究では、被験者の回答が容易なように、類似度について7段階で評定させる方法に変えられた。

ところが、出力されたデンドログラムを筆者がいくら考察しても、解釈不能であった。試しに上記の内藤（1991a）による発表論文の、データの図だけを眺めてみられたい。解釈不能であることがすぐに分かるであろう。そこで、被験者自身に解釈させ、報告させることを思いついた。そうすると驚くべきことに、実に見事に了解できたのである。これが斎藤のいうデータの「認識論的二重操作」であり、「了解心理学的解釈法」であり、「現象学的解釈技法」ということになる。このような解釈方法の有効性は、従来のデータ解釈のあり方に素朴な疑問を抱かせるものである。すなわち、これまでの数量的分析を用いた研究のほとんどが、データの出力まではきわめて操作的で科学的であるが、データの解釈段階に至った途端に研究者の主観的な判断に頼るという事実と、それへの疑問である。この点についての論議はともかくとして、数量的に測定する場合であっても少なくとも個人の主観的世界を扱う際には、「現象学的データ解釈技法」という方法が登場することになったのである。

以上の経過を経て、「個人別態度構造の分析：analysis of personal attitude construct」の基本技法はほぼ確立することとなった。次に現時点での標準的な手続きの概要について述べよう。

(1) 刺激語の決定

精神分析をはじめとする臨床心理学の領域では、個人独自の問題、価値観、世界観、態度などを把握する方法として自由連想が利用されてきた。また、認知科学の影響を受けて、最近になって社会心理学でも研究されるようになった「概念のアクセシビリティ」の考え方をいけば、自由連想はアクセスされた概念に他ならない。つまり、自由連想は、個人の独自な世界観や態度を測定する素材を得る有力な方法であり、今日的にも重要な意義をもつ技法であるといえよう。

ところで自由連想は、図版であれ、単語であれ、連想を開始するきっかけとなる刺激を外部からあたえられたときに生じやすいといえよう。しかしながら、TATやSCT等の投影法のテストであきらかなように、刺激の特性によって引き出される連想内容が規定される。そこで測定したい内容に適合した連想反応を喚起できるかどうかの成否は、提示される「刺激」の良否に依存することになる。実際、筆者が「家族への態度構造」を分析しようとした際に（内藤、1992a）、「家族のイメージ」を刺激語としたときは、家族の名前・父・母が連想されなかった。そこで、「家族について、意味あるもの、重要なものとして、家族の名前などと頭に浮かんできた言葉やイメージ」へと変更せざるを得なかった。

上記の説明からあきらかなように、測定したいものに合わせた刺激を作成するために、予

備調査をしてから「刺激語」を決定することが望まれる。また、これまでの筆者の研究では刺激として「文章」を用いているが、図版でも、音でも、実際の物品でもかまわない。必要な連想反応を喚起するのに有効な刺激であれば、いかなるものであってもよい。

(2) 連想順位と重要順位の測定

連想反応は、縦3 cm、横9 cm程度のカードに実験者が記入するか、被験者本人に記述させるのが、標準的な手続きである。これまでの筆者の研究での反応は単語や文章のみであったが、用紙の大きさを変えて図や絵画を描かせてもかまわない。また、記録に音声テープやビデオを用いるのであれば、音声や楽器の演奏、演技であってもかまわない。測定したい内容に合わせて連想反応を自由に指定してよい。反応の種類を全く制限せず、被験者に委ねる方法もあろう。

反応数については、筆者は刺激語の中で「意味あるもの」「重要なもの」として間接的に制限しているが、あらかじめ反応数を指定してもよい。また無制限とすることも考えられるが、あまり多いと被験者の負担が大きくなり、評定作業の信頼性が低くなることが問題である。

上記のいずれの方法を用いるにせよ、連想順位を記録しておくことは有益である。また、反応項目のイメージ上の重要順位（肯定的という意味ではなく、肯定否定に関わりなく重要な意味をもつ順位）は、分析の重要な資料となることが多いので、測定することが望まれる。カードの場合には、重要順に並べ変えさせるだけでよいので、簡単に入手できる。

(3) 類似度距離行列の作成

行と列の端に番号を記入した行列表をあらかじめ作成しておく。番号には、連想順位または重要度順位のどちらを対応させてもかまわない。次に反応項目の対をランダムに選び（系列効果による偏りを防ぐため）、7段階程度で類似度を評定させる。このとき記号で選ばせた方が、被験者に測定する距離のイメージが湧きにくいので、反応に歪みが少ないであろう。

(4) クラスタ分析

クラスタ分析は、反応項目間の距離行列さえあればよく、平均値も分散も必要ないので、評定を繰り返さずにすむので簡便である。データの安定性や信頼性を高めることをねらって評定を繰り返すことは可能であるが、繰り返すこと自体によってイメージや態度の変容が生じる危険性がある。また、大量に反応させることで、反応がよい加減になる危険性もある。

クラスタ分析の種類の標準的な選択については、有効な解釈に結びつきやすいワード法がよいと思われる。析出結果をデンドログラムで表現する長所は、連想項目間の関係を容易に把握でき、項目のグループを特定しやすいことである。（但し、幾つのクラスタと解釈するかに関しての恣意性は残る。）また、これまでの研究では、結果を被験者自身に解釈させるときにも、分かりやすいようであるという印象を得た。しかし、これでなければならないという制限はなく、自由に選択してよい。また、クラスタ分析以外の分析技法を用いてもかまわない。

(5) 被験者の解釈と報告

まず、クラスタ分析によって得られたデンドログラムの適当な位置に被験者の連想反応の内容を記入する。これを2部作成し（コピーすれば簡単である）、被験者と実験者が1部ずつもち、実験者が各クラスタの項目を読み上げ（連想反応が言語以外の場合には、これ

に準じた方法を考える)、それらから生じたイメージや併合された理由を聞く。これを繰り返して全てのクラスターについて終了した後で、全体の印象を質問する。この後で、実験者に分かりにくい部分について詳細に説明を求める。ロールシャッハテストの実施法と似た手続きである。これは、被験者のイメージや思考の流れをできるだけ妨げずに、イメージや解釈を絞りだそうとすることによるものである。

全体的注意としては、カウンセリングや投影法テストのように、また深層面接調査法のように、「はい」「いいえ」で答えさせないような多義的な質問内容を用いる。また、被験者の反応を十分に引き出すように、「じっくりと」待ちながら聴く姿勢が求められる。

III 単一事例分析の諸技法との比較

単一事例を個性記述的に分析するにあたって、数量的に分析せず、研究者が用意した刺激語のかかれたカードを台紙に直接配置させ、被験者自身の解釈を報告させる技法がある。既述の斎藤(1976)によるものと、水島(1988)によるものである。紙幅の都合もあるので、本稿ではこれらを割愛して数量的分析を利用するものに限定し、SD法、P技法、Q技法、Rep-Test、1事例の実験計画の5つを取りあげる。

1 SD法

SD法の手順は、次のようになる。まず、意味を測定しようとする対象の母集団を想定し、そこから複数の個別的对象(コンセプト)をサンプリングする。サンプリングされたコンセプトを修飾するのにふさわしい、対極的な形容詞対を多数揃えて複数段階に区分して尺度(スケール)化する。選ばれたコンセプトを人々に提示し(1名に対してでもよい)、全てのコンセプトについて全ての尺度での回答を求める。ついで、コンセプトや被験者の違いを無視して、スケールを因子分析する。析出された主要因子(通常は評価性[E]、力量性[P]、活動性[A]の3つとなる)での集団(個人)の平均得点を基に、因子の次元を用いて各コンセプトを空間表示したり、それらの距離を計算して図示する。

SD法は被験者が多人数の場合だけでなく、1名のみでの分析でも用いられる。そこで1名の場合に限定して、「個人別態度構造の分析」技法(以下では、「PAC分析」と略称する)と比較してみよう。

- ① これまでのSD法の標準的な手順では、コンセプトやスケールは研究者が決定する。これに対しPAC分析では、いずれも被験者によって(内包的意味に限定せず)自由連想されたものを用いる。従って、前者は研究者の関心に沿って、後者は個別の被験者自身によってアクセスされたものに沿って分析することになる。(但し、SD法で被験者の自由連想を、PAC分析で研究者が決定したものをというように、互いに拡張して利用することは可能である。)

後者のPAC分析では、前者のコンセプトやスケールに対応する内包的意味の部分に外延の意味をも加えて、単語でも文章でも連想されたものを自由に用いることができる。制限の緩い自由連想を利用するために、連想の表現様式という視点からも個性を捉えることが可能である。そして、個人によって具体的に連想され表現された体験(行動)内

容を分析対象とする点に注目すると、PAC分析の方がより現象記述的であるといえる。同時に治療や行動変容などの実践に必要な具体的な手がかりを得ることができるという利点も持っている。

- ② SD法では、構造はスケール（情緒的意味）の次元によってのみ決定される。他方PAC分析では、SD法のコンセプト（連想的意味）とスケール部分に外延的意味の部分を加え、それらを総合して構造を析出する。両者違いは、意味構造が「何によって」構成されているかについての信仰の差異に基づくともいえるが、「何について」最終的に構造分析したいのかの目標の違いによるともいえよう。

ただ筆者の研究によれば（例えば、内藤1991a, 1992a, 1992c）、SD法のスケールにあたる情緒的意味が連想項目の大半を占める被験者がいる一方で、それらがほとんど連想されない被験者がいた。この結果は、人や対象によって構造を規定する要因や次元が異なる可能性があること、いかなる場合にも情緒的意味の次元だけで構造を捉えようとする事への疑問を提起するものである。

- ③ 結果の解釈に関しては、SD法では研究者のみによるのに対して、PAC分析では、まず被験者に解釈させて、これを了解しながら研究者が総合的な解釈を加える点が異なる。SD法でも被験者に解釈させることは可能であろう。しかしPAC分析の方が、被験者自身が使い慣れ独自のニュアンスを含んだ言葉を対象とするため、解釈させることが必要であるし、それが容易であるといえよう。また、臨床などのように了解的解釈が重要な意味をもつ領域では、後者のPAC分析の方が格段に優れているといえよう。

2 P技法

P技法は、特定の個人についての何回かの観察に基づいて因子分析する方法である。相互に相関させられる変数はR技法と同様であるが、個人に固有な内的構造を分析しようとするところに特色がある。単一の個人をとりあげ内的構造を分析する点ではPAC分析と同じであるが、どのような違いがあるかを考察してみよう。

- ① 上述のように、P技法では繰り返しのデータを用いる。これに対しPAC分析では、繰り返しを必要としない。それでは繰り返すことの意味はどうであろうか。ここでP技法の繰り返しの方法を振り返ると、全変数の測定が何時点かで繰り返されることがわかる。つまり、全変数の組織的な変動を測定することになる。そうでないのなら、変動の不安定性の相関を求めることになるからである。換言すれば、複数時程で測定されたデータをつぶした、平均的データに基づく構造分析ということになる。従って、時間的経過による変動の少ない安定した構造を分析する場合にはP技法の方が、時々刻々と変化する現象を時間的に切断して構造分析する場合にはPAC分析の方が優れていることになる。
- ② 上記①とも関連するが、PAC分析で用いるような自由連想の内容は時々刻々と変化していく。また、これらをP技法のように繰り返して測定すると、意識や態度が変化していくという解決困難な問題に直面する可能性が高い。そこで、少なくとも個人がただ1度しか経験できない現象についてや、意識や態度を測定する場合に関しては、PAC分析の方がふさわしいと考えられる。

- ③ 結果の解釈に関しては、P技法の場合も研究者だけによるのに対して、PAC分析では、まず被験者に解釈させて、これを了解しながら研究者が総合的な解釈を加える点が異なる。体重や身長のように直接的で安定した測度で、被験者の意識を仲介して考える必要度の低いものについては、信頼性の点からもP技法の方が優れているといえる。しかしながら、意識や認知を対象とし、了解的解釈が意味をもつ領域では、PAC分析の方が優れているといえよう。

3 Q技法

Q技法はR技法の逆で、被験者間の相互相関を用いた因子分析によって被験者を分類する方法である。求められる因子は、被験者の個人内差異の共通パターンを表わすことになる。つまりこの方法は、個人の独自の構造を分析するというよりも、共通の変数を用いて人の類型をあきらかにするものである。そこでPAC分析とは以下のような異同を生じることになる。

- ① Q技法は多人数に共有される変数だけを用いるため、個人に独自の要因をとりあげられないという点で劣るが、共通変数による人の類型的分類には強力である。他方のPAC分析は、個に特有な変数を加えることができるために個性記述という点で優れているが、個人間の類型的分類にはデータを2次加工しさらに分析することを要するという難点がある。
- ② 特定の個人についてみれば、いずれの方法においても測定の繰り返しを必要としない点が共通する。反応の制約という点では、Q技法では尺度の各段階に正規型に強制的に分布させる必要があるので、PAC分析の方が歪みが少ないし被験者にとって楽である。
- ③ 被験者による結果の解釈に関しては、Q技法では他者との比較を前提とするので、分析対象となる人々全体について、少なくとも同一因子に属する人々についてよく知っていなければならない。他方のPAC分析では、個性記述的な変数を用いているので単一の被験者の独自性を分析するには有効であるが、他者との比較に関してはQ技法以上に困難である。両者の違いはアプローチの差異によるものであり、Q技法が他者との比較を通じて個を分析するのに対し、PAC分析では個に関する変数だけで個を分析しようとするところにある。両技法の目的が異なっており、比較そのものが意味をもたないともいえよう。

4 Rep-Test

Rep-Testの手順は、次のようになる。まず、被験者の人生において重要な役割を果たす具体的な人物名をあげさせる。つぎに人物のリストから3人1組のセットを作り、各セットごとに2人に共通して残った1人にあてはまらない特徴をあげさせる。ついでこの特徴と反対の特徴を答えさせる。こうして得られた特徴の対がコンストラクトと呼ばれる。このコンストラクトを尺度として一人ひとりの人物について回答させ、尺度の因子分析をする。最後に、抽出された次元に基づいて役割人物をプロットする。単一個人の独自の構造を分析する点でPAC分析と同じであるが、両者の差異を考察してみよう。

- ① まず最初に、分析する対象の範囲の違いがあげられよう。Rep-Testでは、(技法の

適用範囲を拡張することは容易であるが) 対人認知に限定されている。これに対しPAC分析では、態度対象となり得るあらゆる対象に適用しようとする。

- ② Rep-Testでは、対象の認知に差異を生じる特徴(コンストラクト)のみによって次元を抽出する。他方のPAC分析では、全ての連想項目によって構造を捉える。SD法のところで論じたのと同じように、構造をどのように定義するかの点で異なっているといえよう。
- ③ 分析の素材に目を向けると、どちらの技法も個人独自の対象や反応(連想)を利用する点では同じである。しかし、Rep-Testでは文章で表現させないのが通常であるし、尺度となるコンストラクトでは対極の設定を必要とする。PAC分析ではこのような制約がない。
- ④ 結果の解釈に関しては、Rep-Testでは研究者のみが行うのに対して、PAC分析では被験者の解釈を踏まえることが重要な役割を果たすことが多い。後者では、被験者の内的世界をできるだけ素朴に、加工を少なくして描き出そうとする点に特徴があるといえよう。

5 1 事例の実験計画

単一の事例をとりあげ要因分析する方法として、1事例の実験デザインと呼ばれる技法がある。これはベースラインを測定し、A, B, A, B, A, Bのように関連する要因をパターン化して繰り返し操作することで、得られた測定値の平均値と分散を基に統計的に分析するものである。被験者が1名であるという点ではPAC分析と同じであるが、両者の差異を検討してみよう。

- ① 1事例の実験デザインは、独自性をもち多種多様な要因が相殺されることなく複合的に作用する個人を扱いながら、実験要因を統制して効果を検討できるところがたいへん優れている。しかしながらこの方法では、特定の要因のみをとりあげて分析することになり、全体構造を測定することができない。また、要因の操作を繰り返すことができる場合にしか用いられない。例えば、学生が初めて就職した効果を検討するとき、1度も就職しなかった以前の状態に戻して繰り返すことはできない。さらに、測定を繰り返すことは、被験者に内省を繰り返させることを意味し、それだけによっても態度変容を生じさせると考えられる。他方のPAC分析は、時々刻々と変化する現象の全体構造を捉えるものであり、要因の効果は全体構造の質的变化として分析することになる。特定個人が生涯にただ1度しか経験しない現象についても分析可能である。
- ② 実験デザインでは要因の効果を吟味することに、PAC分析では構造を記述することに焦点が置かれている。このようなアプローチの違いによるものであるが、実践的に診断し、行動変容や治療を目指す場合には、具体的な現象や行動に関して記述された項目を入手できる後者のPAC分析の方が有利である。
- ③ 結果を被験者自身にも解釈させることの必要度は、要因を少数に絞り込む実験デザインではかなり低い。これに対してPAC分析では、被験者自身の独自の現象的世界を広範に記述しようとするので、被験者による解釈が決定的な役割を果たすことが多い。

以上、数量的分析に限定してではあったが、個人別態度構造の分析技法（PAC分析）とこれに関連する諸技法との比較を行ってきた。これらの作業を通じて、個人別態度構造の分析のアプローチと技法が、従来のいずれの技法とも異なった独自の役割と価値をもっていることがあきらかにされたといえよう。そこで次節では、この技法を用いることで、各専門領域にどのような貢献ができるかに的を絞って論考していきたい。

IV 個人別態度構造分析の意義

個人別態度構造の分析技法（PAC分析）が心理学や周辺の学問分野の各領域でどのような価値をもつかを論考し説明することは、個人や単一集団についての新たな分析技法としてこの技法を利用することを提案するにとどまらない。技法の提案を通じて、これまでは操作的、科学的な研究技法が未開発あるいは不十分であったがゆえに等閑視されてきた、「個」へのアプローチ全体を活性化すべきことを提言することになる。むしろ筆者の期待するところは後者であり、個の独自性とそれを踏まえた普遍性を解明することにより多くの研究者が関与し、本技法を踏台として異質の技法やより優れた技法が多数出現することにある。

1 臨床心理学的意義

個人を対象とする場合と個別集団を対象とする場合とでは、現象に関与する要因の種類や範囲、また治療的に介入する際のアプローチの仕方が著しく異なっている。そこで両者を分けて論じたい。コミュニティへの介入のように個人と集団の両者をともに扱う場合については、とりあえずはどちらに視点があるかで分類する。

(1) 個人を対象として

個人の治療や教育を目標とする臨床心理学においては、個々人の固有性やその構造を研究すべきであるとの主張は容易に受け容れられるであろう。個人の特有性を踏まえないければ臨床の実践が成り立たないからである。こうした主張はあまりに自明であり、Allport (1942)の個性記述的な事例研究法に関する提言を知るか否かに関わりなく、日常の実践の中で試みられている。従って、臨床家にとっての関心は、開発された技法が臨床の実践にどれほど有効であるかという点にある。長期間にわたって情報を収集したり観察することを要する従来の事例研究法に代わる、あるいは補完するものとして、いかに操作的・科学的で簡便であるかが問われることになる。

そこでこの項では、PAC分析が臨床実践においていかなる点で有効であるかを中心にして述べることにする。また、考察や説明の便宜を考え、「診断」と「治療」に分けて論じる。

1) 診断

個人の診断に関連する実証研究としてすでに発表したのは、個人の過去・現在・将来の重要項目を分析したもの（内藤, 1991a）、個人の家族への態度構造を検討したもの（内藤, 1992a）がある。前者は、個人に一貫して出現する枠組みや時間展望、アイデンティティの

検討に有効であるといえよう。また、後者は、家族関係の認知構造を分析したり、家族療法での診断をする際に有効であるといえよう。これらの他にもなされた一連の研究成果を基に、臨床の実践に活用できるポイントを考察し、以下に列挙してみよう。

- ① ただ1名の被験者に対して、ただ1度の測定だけで、その人独自の態度構造を分析することができる。
- ② とりあげる被験者が自由連想できる対象でありさえすれば、あらかじめ尺度構成する必要もなく、繰り返し測定する必要もなく、あらゆる態度対象の構造分析に適用できる。いわば、各種の心理テストを入れた引出しを背にすることなく、あらゆる臨床問題についてすぐその場で測定し、分析することが可能である。
- ③ 心理テストなどと違い、現象や問題そのものに焦点を当てて変数を収集し、その構造を分析することができる。
- ④ 自由連想を利用することから、当該の被験者自身にとって意味をもつ。また重要な対象をとりあげることができる。これまでの筆者の一連研究において、人によって連想される項目が全く違うことが確認されている。
- ⑤ 自由連想を用いるため、被験者自身が意識化していない無意識（少なくとも前意識）の部分に関わる項目を得ることができる。
- ⑥ 一連の実証研究での連想項目における表現様式をみると、象徴的なイメージのつながりを示唆する連想的意味、暗い・暖かいなど情緒的な意味、辞書的に説明するような外延の意味、のいずれもが出現しており、人や対象によってそれぞれの比重が違ふとみなせるものであった。また、表現の形式は、単語、熟語、文章、受動的、能動的、というように多彩であり、どれかが主体になる場合と、混合される場合があった。これらの表現様式自体によって、臨床的に意味のある解釈を引き出すことができる。
- ⑦ 結果を被験者自身に解釈させることで、研究者や臨床家が解釈できない独自の構造を解釈できる。裏面からみれば、現象学的データ解釈技法を用いなければ理解できないほどの、個人に固有な連想項目とその構造を分析していることになる。
- ⑧ カウンセリングなどで面接を数回繰り返すことで得られる分析成果を、ただ1度の測定と解釈をさせることで済み、時間的効率が飛躍的に向上する。
- ⑨ 技法化されているために、簡単な訓練で利用可能である。技術の習得が容易であるので、臨床家の底辺の嵩上げに有効である。個別性を理解させるための教育訓練にも活用できる。
- ⑩ 数量的処理を含めて、操作的手続きによって構造分析と解釈をするために、研究者や臨床家の理論的立場による影響が少ない。また、研究者や臨床家の主観によって構造分析や解釈が歪む可能性が少ない。
- ⑪ 連想項目間の類似度を評定させるという簡便な手続きだけで、測定時点での被験者の態度構造を抽出できる。
- ⑫ 大型計算機は必要なく、市販の統計ソフトを入力したノート型パソコンと簡単なプリンターさえ携帯すれば、いつでもどこでも分析可能である。
- ⑬ 技法を理解し、練習すれば、被験者自身が単独で分析できる。これにより、他者に知られたくない自己のある側面について、どのような内容から構成され構造化されている

かを秘かに知ることができる。

- ⑭ 治療者が診断・評価を試みるに際して、患者情報を意識的、意図的に分析するのが困難なとき、治療者自身が情報の構造分析として活用することが可能である。

さらに、SCT, TAT, ロールシャッハテストなどの各種投影法テストに本技法を利用することで、以下のようなアプローチが可能である。被検者の反応は言語に限定する必要がない。描かれた絵や遊具を用いてもよい。従って、箱庭療法や遊戯療法、各種の芸術療法への応用も可能であるといえよう。

- ① 被験者の反応をカードに書いて、カード間の類似度を評定させれば、構造分析できる。(カードの代わりに遊具などの実物を用いてもよい。)
- ② また、上記①で析出された構造を被検者に解釈させれば、筆者のいう現象学的データ解釈技法を採用することになり、投影法テストの了解心理学的解釈への道を開くことになる。治療技法としても活用できる(後述の「2) 治療」を参照)。

なお、実際にどのような臨床問題に利用できるかの例は、現在までの実証研究が少ないこともあり、V節の今後の研究課題のところでとりあげる。

2) 治療

治療は診断に基づいて行われるし、治療を通じて診断が確定したり、治療効果を確認するために診断的評価が実施される。診断と治療はサイクルをなし、厳密に考えると分離できないことが多い。ここでは大ざっぱにPAC分析がどのような治療的効果をもたらすかを考察し、列記したい。

- ① 被験者自身が連想し、項目間の類似度を評定した結果に基づいて、パソコンによって析出する。このようにして得られたデータの解釈という、自己からいったん切り離し客観視させる形で、被験者自身によって「明確化」という作業が遂行される。このため明確化への抵抗が少ない。
- ② 連想項目は被験者の使い慣れた、独特なニュアンスをもつものから構成されているので、被験者の解釈(明確化)が容易である。
- ③ 項目は、自由連想によって得られているので、無意識(少なくとも前意識)まで踏み込んだ構造を解釈(明確化)させることになる。
- ④ フォーカシングの技法では、構造にびったりする「言葉」が発見されるまで次々と連想し、不要とされたものは捨てていく。これに対し、PAC分析では、クラスターを構成する項目群全体を使って、それらが共通に指し示す方向にあるものを探るので、発見(解釈)が容易である。
- ⑤ 解釈を被験者自身にさせることは、被験者に問題から逃げ出さないで直面させることになる。
- ⑥ 解釈の内容を治療者に表明させることは、社会的(対人)関係の中で問題を考えさせることになる。
- ⑦ 治療者(他者)へ報告することは、問題にコミットさせることになり、問題への意識を高め、治療への意欲をもたせることになる。
- ⑧ 被験者が自身の解釈を治療者へ表明することは、データの解釈の報告という自然な形で、被験者と治療者が問題への理解を共有することになる。

- ⑨ 治療者は、被験者の内的世界に関する情報を、カウンセリングなどと比較すると、著しく短時間のうちに収集できる。また、これに基づいて治療の手がかりを得ることができると。
- ⑩ 被験者自身の問題構造の理解を共有するという形で、治療者-被験者の治療的人間関係を構築できる。(治療者へのイメージや治療者との関係について、また被験者へのイメージや被験者との関係について、被験者及び治療者のそれぞれの自由連想をPAC分析すれば、治療的関係の分析すら可能である。)
- ⑪ 連想項目には具体的な対象や行動が含まれているので、治療目標の設定や行動変容のプログラム作成が容易である。
- ⑫ 治療効果の判定のために測定を繰り返す場合には、構造の質的变化を分析できる。つまり、治療による質的变化を連続的に分析するのに有効である。
- ⑬ 被験者が単独で分析することも可能である。繰り返し測定することで、自己への治療的試みの効果を検討することもできる。これは、セルフ・(ヘルプ・)カウンセリングの強力な技法として活用できることを意味する。

上記の特徴は、認知構造や意識構造が関与する問題の治療に際して強力であることを示唆している。まだまだ考察できていない部分が多いと思われるが、ひとまず打ち切って集団を対象とする問題に移ろう。

(2) 集団を対象として

ここでの集団を対象とするものというのは、集団療法をさすのではない。そうではなく、単一の特定集団をとりあげて集団自体を対象として診断や評価を行い、それに基づいた治療的介入によりその集団の改善を目指す場合、をとりあげようとするのである。

具体例としては、家族ホメオステシスのように、単一の家族全体を診断し治療しようとするもの、特定の学級集団全体を単位として診断し、治療的に介入しようとする臨床的な個別学級集団へのアプローチ(内藤, 1991c)、コミュニティ全体を単位として診断し、介入するコミュニティ心理学のアプローチなどがある。治療的に介入するためには、個人を対象とする場合と同じように、特定集団の固有性や独自性をも包含した全体構造を把握することが必要である。ところが、診断的評価や介入に関してこれまで実際に用いられてきた方法は、いわゆる事例研究法であった。

上述のような背景から、個人の場合と同じく、長期間を要し、理論的背景や主観に左右されやすい、従来の事例研究法に代わる、あるいは補完する操作的、科学的な分析技法の開発が望まれる。こうした試みの嚆矢ともいえるのが、内藤(1992b)の「学級風土の事例記述的構造分析」の研究である。この成果を踏まえながら、PAC分析の診断と治療的介入への利用可能性を探っていきたい。

1) 診断

上記の内藤の研究では、単一の学級集団を対象とし、経営責任者である担任教師の認知を用いて構造分析をしている。運営に失敗した学級と成功した学級を比較した結果は、診断技法として有効であることを確認するものであった。以下に、PAC分析による集団の診断に関連した前提や有効性の事項を列挙する。

- ① リーダーやファシリテーターの集団についての自由連想を通じて、問題の構造分析が可能である。
- ② たとえ上記の連想や分析された構造が誤った認知によるものであったとしても、決定的な運営責任をもつリーダーがそのように認知していること自体が、実際の集団構造を規定している。このため、ある側面の集団構造を分析しているということになる。
- ③ あらかじめ尺度構成する必要もなく、繰り返し測定する必要もなく、特定集団のあらゆる問題の構造分析ができる。
- ④ リーダーが観察したり、直感的に感じている、当該集団についてのあらゆる変数を取りあげることができる。
- ⑤ 自由連想を用いるために、リーダーが意味づけたり、構造化してとらえていない変数を取りあげることができる。
- ⑥ 時々刻々と変化する集団現象を、時点時点で捉えて簡便に分析することができる。
- ⑦ 集団の問題のデータ分析と解釈という形態をとるため、リーダーという立場からいったん離れて客観視できる。
- ⑧ 連想項目がリーダーの使い慣れた、独特のニュアンスをもつものから構成されているので、リーダー自身にとって解釈が容易である。
- ⑨ 市販の統計ソフトを入力したノート型パソコンだけで、いつでもどこでも簡便に構造分析できる。
- ⑩ 分析と解釈の報告を通じて、リーダーとコンサルタントとがすみやかに問題事項を共有し、問題構造の理解を共有することができる。
- ⑪ 副次的にはあるが、リーダーの集団運営能力の診断として利用することができる。
- ⑫ 簡単な訓練で、リーダー自身が単独で他者に知られることなく、集団の問題を分析し、診断することができる。

2) 治療的介入

リーダーの自由連想を通じてであるが、多種多様な要因を取りあげながら集団の問題を構造分析できることが明らかになった。この診断を踏まえどのように治療的介入に活用できるかを考察し、列挙する。

- ① リーダーの経験と直感に基づいて集団の運営がなされていたのが、客観的、科学的になる。
- ② 時々刻々と変化する集団現象を、時点時点で捉えて簡便に分析することができるので、介入の時期を逸しないですむ。
- ③ 集団の問題のデータ分析と解釈という形態をとるため、リーダーという立場からいったん離れて客観視できる。このため問題への気づきに抵抗が少ない。
- ④ 解釈をリーダー自身にさせるので、リーダーに問題から逃げずに直面させる効果がある。
- ⑤ リーダーが、自身の連想した項目をもとに数量的に分析し、自身が解釈するため、問題への関与度と興味が増し、治療的介入への意欲が高まる。
- ⑥ 集団運営におけるリーダー自身の問題がリーダーによって発見される。このためリーダーの教育訓練及び自己啓発や自己訓練への抵抗が少ない。(教育訓練の技法そのもの

としてPAC分析を利用できる。)

- ⑦ 連想項目には、具体的な問題事象が含まれているので、介入のための具体的な手がかりを得ることができる。
- ⑧ リーダーとコンサルタントとが問題意識や理解を共有しながら介入することが容易となる。
- ⑨ 測定を繰り返すことで、診断の内容や介入の効果を確認しながら介入を進行していくことができる。
- ⑩ リーダーが単独で分析できるので、コンサルタントの助言なしでも、診断し、介入していくことができる。

以上のように集団を対象とした場合のPAC分析の有効性を検討してきたが、関連研究がほとんどないこともあり考察が十分でできなかった。関連研究の少なさは、そもそも単一集団を単位として捉え、個別集団の独自性そのものを数量的に分析する研究がなされてこなかったからである。個人の認知構造や態度構造を介さずに分析する方法も考えられよう。しかしその場合には、膨大な関連要因の全体を捉えその集団独自の決定因をどのように抽出するかという大問題に直面する。他方のPAC分析のような認知を媒介させる立場では、リーダーやキーパーソンが複数の場合にはどのように合成するかという問題に直面することになる。複数回答者の結果の合成の問題は、V節の今後の課題のところで再びとりあげたい。

2 社会心理学的意義

社会心理学では、個人の独自性の問題に最も関わるのは「態度」である。そもそもの態度の定義が、個人の態度を対象としているからである。ところが、長い間、態度の構造についてはある一群の人々に共通するものとして扱われ、個人差は共通次元での強度の差として測定されてきた。しかし、きわめて最近のことであるが、認知科学の成果を踏まえて、態度において再び個人の独自性に関わる研究がみられるようになった。他方の集団の独自性を扱う研究は、コミュニティ心理学での介入研究が存在する程度で、臨床心理学的意義のところでは言及したのと同じく不活発である。

(1) 態度研究

社会心理学の教科書をほんの数冊繙くだけで、態度が次のように定義されていることがわかる。態度とは、刺激と反応を媒介する仮説構成体である。それを具有する主体者は、現実の集団でも集団心と呼ばれるものでもなく、特定の個人である。態度を構成する対象は、当該個人の心理的世界に存在するものなら何でもよい。態度の形成や変容は、個人の情報への接触や体験に基づく。態度を構成する諸要素は、分化・統合され、構造化される。これらの定義を基に、まず、個人別態度構造の分析に関する研究が、いわゆる法則定立的研究にどのように貢献するかについて考察してみよう。

1) 個人別態度構造の分析と法則定立的研究

個々人が接触する情報や体験の内容を長期にわたって観察するならば、全てにおいて共通することはきわめてまれである。というより、現実にはあり得ないといえる。また、個々人の性格や社会的背景の違いのために、同じ事象であっても異なって認知され、体験されることになる。このために、態度の構成要素や全体構造は、一人ひとり異質なものとならざるを得ない。

しかしながら、これまでの長い間利用されてきた態度測定技法は、一群の人々に共通する次元だけを抽出し、尺度構成し、集団における相対的位置として個人の態度を測定してきた。個人の態度は、共通特性のみによって描かれてきたのである。例えば、ある男性が女性に好意を抱く条件として目の美しさを、別の男性は肌の柔らかさを、次の男性は臭いを、さらに別の男性は乳房の大きさや形を、というようにそれぞれに決定因が異なっていると仮定する。すると多くの人で異なる特性は残差成分として排除され、個々人にとっては順位の低いスタイルや態度の類似性要因が浮かび上がってくることになる。それぞれの事例を吟味し、「身体部位に関する魅力要因」としてとりあげれば抽出できるものを、残差成分として看過してしまうことになる。個人別に分析することは、これまで見捨てられてきた普遍的特性を発見する可能性をもつといえよう。さらに、ある一群の人々に特有の、その人独自の特性や構造の普遍性を解明することにもなる。

また、個人別に態度の全体構造を分析することで、各人の構成要素の内容が異なっているにもかかわらず、態度構造の形態上の普遍性を検討することができる。例えば、野球部に入部した者と、文学サークルに入会した者とは、それぞれの態度対象とその内容は全く異なるが、態度がどのように形成され構造化されるのか、それぞれの段階での変容への抵抗がどのようなものであるかを吟味できるであろう。

以上は、多くの人々に共通する法則定立的側面に関する研究への貢献について論じたものである。次の項目では、個性記述的な態度研究の技法として、PAC分析がどのような意義と活用可能性をもつかについて論じよう。

2) 個人別態度構造とPAC分析

社会心理学において洗練されてきた多様な尺度構成の技法を駆使し、態度構造を分析し、個人の得点を算出しても、しかも複数の尺度を用いても、個々人を描き切れていないという実感を拭いきれない。それは、個人に特有な変数が欠落し、固有な構造が明らかにされていないからである。

抽象的・平均値的な人物の社会的行動は描けても、実在するあの人やこの私の行動を理解したり、十分に予測することができない。換言すれば、全ての人に共通する側面とある人々に共通する側面の2つはある程度分析されているとしても、その人独自の社会的行動の側面がとりあげられてこなかったといえよう。11人の中で9人が右に行く、これが繰り返し観察されれば、人には右に行く傾向のあることが統計的に検証されたとみなされる。右に行かない2人は、本来右に行く傾向が備わっているのだが、顕在化されなっただけである。ある尺度得点で人を4群に分割したら、行動特性が違っていた。人は4群に分類される。ある特性の尺度得点と別の行動得点の相関を算出したら有意であった。この種の行動には個人特性が関係している。そのように解釈される。これだけでよいのだろうか？

全ての人に共通するもの、ある種の人々に共通するもの、その人に独自なもの、これら全

てを包含した全体構造を測定できないだろうか？ この設問に対する解答のひとつが「個人別態度構造の分析：PAC分析」である。技法の概要についてはすでに述べてあるので、ここでは社会心理学における態度構造の研究にどのような貢献ができるのかを具体的に考察する。

- ① 自由連想の技法は臨床的であり、古めかしいという批判があるかも知れない。これについての正当な反論としては、学問的価値は研究が推進されてきた領域や古さには関係ないという主張である。それを受け容れない研究者に対しては、認知科学の成果を踏まえて最近に着手された、態度対象に関連する概念の「アクセシビリティ」に関する研究をあげることができる。つまり、自由連想を用いたPAC分析は、社会心理学領域での現代最先端の研究と結合されるのである。
- ② PAC分析においては、全ての人々に共通するもの、被験者を含む部分集団に共通するもの、その人独自のもの、それら全てを包含した全体構造の分析が可能である。
- ③ 上記②の理由により、特定個人の行動予測力を飛躍的に向上することができる。これは、態度と行動予測力の論争問題に対してひとつの解答をもたらすことになる。
- ④ 従来の態度の諸研究を個人別態度構造の観点から再検討することを可能にし、新たな態度研究の課題を創出することで、態度研究を活性化できる。例えば、下記⑦⑧の各種指標での得点を、認知的不協和理論やバランス理論のような、認知的一貫性理論として総称される諸研究に応用することができる。また、とくに強度の測定だけに終わっている研究については、構造の観点からのアプローチが可能であろう。
- ⑤ PAC分析が提案する、結果を被験者自身に解釈させ、それを踏まえて研究者が解釈する「現象学的データ解釈技法」は、個人の独自の態度構造を理解する方法として有効である。
- ⑥ 個々人の各クラスターを質的に分析し命名することで、被験者間で内容的に類似あるいは共通するカテゴリーを発見することができよう。その場合には、同一内容クラスターについて下記⑧の各種指標で得点化し、被験者（集団）間の統計的検討が可能となる。また、質的に異なったクラスターの数や項目数についても、下記⑦で示すように、得点として比較検討することができる。
- ⑦ 構造については、質的に分析するだけでなく、クラスターの数、各クラスターの項目数を基に、分化度や統合度を算出できる。これによって説得などによる構造の変容を数量的に測定でき、他の被験者とも統計的な比較が可能となる。
- ⑧ 構造だけでなく、強度を分析できる可能性が開かれている。この点については、筆者は当初気づいていなかった。内藤（1992c）の「政党への個人別態度構造の分析」での5つのデンドログラムを用いて、知人に技法の説明をしているうちに、次のことを発見した。態度対象を含むクラスターを構成する各項目のプラスとマイナス（その強度を測定してもよい）の判定を被験者に求め、合計点を算出することができる。合計点の算出にあたっては、各項目の重要度順位を使って重みづけをしてもよい。同一クラスターに複数の対象を含む場合には、いずれも同じ得点とするとか、項目が主としてどちらに属するかを判定させるなどの方法が考えられる。また、各クラスターごとにプラスの項目だけの合計点とマイナスの項目だけの合計点をとり、それらを比較することで両面価値

感情や葛藤の指標とすることができる。所属のクラスターを無視して全体で算出すれば、全体的な両価感情や葛藤の強さの指標とすることができる。具体案としては、〔プラス項目の合計得点+マイナス項目の合計得点(数値はマイナス)〕の絶対値+1を分母とし、プラス項目の合計得点の絶対値+マイナス項目の合計得点の絶対値を分子とすることで計算できる(分母の[1]は、分母が[0]となることを避けるために便宜的に加えたものである)。

以上のようにして算出された得点とクラスターを基に、正負の符号と強度を矢印で表示するならば、場理論での力の場を数量的かつ図式的に表現することになる。

- ⑨ 対象の側に注目すれば、研究者が関心をもつ対象項目を含む各クラスターでの項目数や両価感情について、集団での平均や分散を算出することができる。例えば、上記の内藤(1992c)のように政党への態度を分析する際には、自民党や社会党などについての得点を算出し、政党間で比較することができる。また、自民党だけ、社会党だけというように、単一の対象を連想刺激とし対象ごとにPAC分析すれば、被験者間や対象間の比較は著しく簡便となる。

まだまだ検討すべき課題があるであろうが、次の機会に譲ることとし、個別集団研究の問題に移ろう。

(2) 個別集団研究

集団に関する研究は多いが、個々の集団の独自性に注目する研究は少ない。アクション・リサーチで現実の集団を対象とすることは多いが、そこでの力点は、実験室の集団でも現実の集団でも、どの集団にもあてはまる普遍的法則を解明することにある。社会心理学の領域とも重なるという意味で該当するのは、臨床心理学のところででもとりあげた、コミュニティ心理学での介入研究、個別学級集団へのアプローチ(内藤・田中・天根・蘭・藤田, 1992)などである。むしろ商学での企業経営や工学での工業経営の分野の方が、現実の組織体の(経営)診断や、改善のための対策決定、介入とその効果の評価という観点から、個別性に価値を置いているといえよう。

ここで社会心理学の研究法、とくにグループ・ダイナミックスに関して問題提起した木下(1968)の8つの主張のうち、個別集団研究に関わる部分を拾い出してみよう。(項目番号と文章は、原文のままである。この資料は、木下先生ご本人から紹介して頂いた。)

① 集団を構成する基本的要因の研究の不足

多くの研究は、集団を一般的・包括的に処理するが、現実の集団は、大きさ、課題構造、成員の属性などの点で、多種多様であり、それにしたがって、集団過程も違ってくる。このような多様性に目を向けて、研究結果を現実場面に応用しにくい、という批判に答える必要がある。

③ 臨床的資料の不足

グループ・ダイナミックスは、もっぱらアメリカ的発想による精緻な実験的方法によるが、特殊要因の発見には、臨床的方法の導入が必須であろう。

上記の木下の主張からも、現実の集団では多種多様な要因が働いており、特殊要因の発見のためにも臨床的研究が必要であることが窺える。しかしここには、特定の単一集団の独自

性そのものを捉え、構造的に診断するという発想はまだない。

いずれにしても、集団に関する研究は社会心理学に属し、臨床心理学的方法を用いるべきであるという見解が一般に受け容れられるとするならば、PAC分析の技法と個別集団へのアプローチは、社会心理学においても有用なものといえることになる。臨床的なアプローチにおいてPAC分析がどのような効用をもつかについては、すでにかなり詳しく論じてきた。そこでここでは、特殊要因の発見や、要因間の関係構造の解明、構造の形態上の普遍性の発見にも貢献できることを、補足的に言及するにとどめたい。

3 その他の領域・分野への応用

先に、社会心理学の態度研究において、認知科学の基本概念のひとつである「アクセス」を導入した研究が存在すること、またアクセスとPAC分析での「自由連想」とはかなり類似した概念であること、について言及してきた。とするならば、逆にPAC分析の技法の側からも認知科学に貢献できるのではないかと推論される。そこでまず、認知科学分野における研究への応用可能性から考察してみよう。ついで、社会学・政治学、言語学・文学など、その他の分野への応用についても論じていきたい。

(1) 認知科学への応用

PAC分析で用いる連想のための刺激提示は、認知科学のアクセスの文脈で考えると、長期記憶の再生を促進するための検索の手がかりをあたえることになる。この手がかり刺激によって、長期記憶に蓄えられたイメージや概念がどのように検索されるかが、認知科学の関心内容であろう。

そこで、長期記憶検索の分析に関連して、PAC分析の技法が貢献できる点を列挙してみよう。

- ① 長期記憶の内容は被験者によってかなり異質である。それぞれの被験者に独自の記憶内容を取りあげ、そのアクセスの仕方、アクセスされた項目の構造を解明するには、被験者ごとの分析が必要である。これに適合するのがPAC分析の技法である。
- ② アクセスの順位については、PAC分析での自由連想順位をあてることができる。また、その反応時間を測定することも容易である。反応時間を測定するためのボタンと音声による報告を記録するテープレコーダーを用意し、とりあえず反応時間を測定し、その後で概念やイメージの図をカードにかかせることができる。
- ③ PAC分析では、アクセスの順位に影響する要因のひとつと考えられる、各項目のイメージ上の重要度順位（肯定的という意味ではなく、肯定否定に関わりなく重要な意味をもつ順位）が測定されている。
- ④ PAC分析は、被験者1名のその人独自のアクセス項目の構造分析を、項目間のイメージ上の類似度を用いて行うことができる。そして、態度の構造形態の分析のところで既述した構造上の得点をも活用することができる。このPAC分析によるアクセス項目の構造分析は、次のような意味をもつと仮定される。

長期記憶されているイメージや概念項目の検索は、被験者のイメージ空間における項目群の類似度の距離によって影響される。被験者のイメージ空間は各人に独自なものであり、その母体はいくつかの下位構造から構成されている。項目検索は、母体の各下位構造からなされるが、アクセス（自由連想）のための提示刺激と、それによって検索されつつある項目群によって一時的で、2次的に形成された下位構造の影響を受ける。アクセス（検索）は、項目のイメージ上の重要度順位によって規定される。さらに、項目間のイメージ上の類似度距離が近いほど、互いに促進的にアクセスに作用する。また、アクセス（検索）の仕方には、複数のパターンや個人差がある。

以上の提案や仮定（理論及び仮説）の基に、実際の検索がどのように進行していくのかを、それぞれに仮説を立てながら実験的に検討することが可能である。

- ⑤ これまでのPAC分析の研究では自由連想を主体としているが、研究者が指定した項目だけを用いて検討することもできる。個々の被験者が項目をどのように構造化するかは、当該被験者のスキーマ等によって間接的に影響を受けるからである。この方式の場合には、被験者間の比較が容易であり、被験者を群に分類して行うさまざまな検討を簡便に実施することができる。
- ⑥ PAC分析での被験者自身にアクセス項目の構造を解釈させる「現象学的データ解釈技法」は、研究者が直接には窺い知ることが困難な、被験者独自のイメージ構造の質的解釈を容易にする、あるいは可能にすることになる。
- ⑦ PAC分析の技法は、被験者別構造分析へのアプローチの口火となり、新たな技法開発のモデルとなる。

以上の他にもPAC分析の側から提起できる重要な問題や仮説があるであろう。認知科学の専門家とのディスカッションの機会をもち、双方への貢献可能性を探っていきたい。

(2) その他の分野への応用

これまで心理学の分野でPAC分析との関わりが大きい領域に範囲を絞り、詳細に論じてきた。しかし、個へのアプローチやPAC分析技法は、心理学以外の広範な分野に対しても応用可能である。そこで可能性を暗示することを目的とし、思いつくままにはあるが、例をあげながら簡単に提案したい。

1) 社会学・政治学への応用

政党の党首など、調査対象者が1名しか存在しない場合、あるいは企業経営者のように少数であるときには、PAC分析が有効である。また、政党を支持しないのに賛成投票をする場合などにおいて、対象者を詳細に質的に分析し、要因の発見や仮説を導き出す技法としても活用できる。

PAC分析は、深層面接調査法で得られたデータを質的に構造分析する技法であるともいえる。自由連想が可能なあらゆる問題について、たった1名の調査対象者で分析が可能である。とくに、市販の統計ソフトを入力したノート型パソコン1台とカードさえあれば、いつでもどこでも調査できる点は、実用的にも価値があるといえよう。

2) 言語学・文学への応用

方言などの調査で、ある年代や地域に範囲を絞ると、調査対象者が少数となることがある。

PAC分析ならば、対象者が1名でも、言語のイメージ構造の分析が可能である。また、例えば沖縄で育った人が雪国で生活するようになる場合などには、冬や降雪を体験する前と後で「冬」「雪」のイメージがどのように異なるかを分析できる。つまり、言語イメージの形成過程や変容過程を実験的に分析する際に利用できるといえよう。

文学への応用としては、短歌、俳句、小説などを刺激としてPAC分析すれば、作品解釈の個人別構造を解明できる。

上述以外にも、多様な分野でさまざまに利用可能であろう。また応用テーマを考案したり、実証研究を進める過程で、技法を改善したり、新たな方法を考案する必要性も生ずるであろう。次のV節では、これまでの一連の実証研究の範囲内ですでに気づいた、今後推進すべき研究課題や技法面での改善・開発課題をとりあげよう。

V 今後の課題

これまでの実証研究および本稿での論考からだけでも、PAC分析は個を分析するのに有効な道具であり、理論的にも大きな膨らみをもつことが確認された。それとともに、考察を深めれば深めるほど、発展的あるいは付加的に、技法がもつ意味の発見や適用範囲の拡張、新たな仮説の産出が持続することに気づかされた。今後さらに研究を進めるにつれてどのような課題が飛び出してくるかを、今から予測することは不可能である。そこで現時点までに気づいている主要課題に的を絞り、「研究課題」と「技法の改善と開発」に分けて叙述する。

1 研究課題

ここでは研究課題として、適用範囲の拡張、連想刺激の研究、外的基準による妥当性検討、複数回答への対処、の4つをとりあげる。

(1) 適用範囲の拡張

理論や技法の価値を判断する基準のひとつは、適用範囲が広いことである。適用範囲の拡張は、評価的価値を高めるためだけでなく、拡張に際して新たに生じた問題解決を通じて理論や技法を洗練していく効果をもつ。既述のように、PAC分析は自由連想が可能ならばいかなる対象についても利用可能である。そこで範囲の拡張は、個に即したアプローチが有用である領域やテーマの発見数に依存する。筆者がすでに研究したものやデータを収集済みのものを一部含めて、領域別に重要と考えられるテーマの幾つかを列記しておく。

1) 臨床心理学

臨床の領域では、個へのアプローチを必要とするテーマは無尽蔵に存在する。早急に着手すべきものを、思いつくままにあげてみよう。

- ① まず最初にとりあげるべきものは、「ストレス」であろう。ストレスの刺激、認知、反応、対処機制、防衛機制は、個々人によって違い、当該個人によってそれらがどのように構造化されているかが問題となる。

- ② 「無気力」や「燃えつき症候群」についても、症状、認知、対処機制、防衛機制などが、個人の中でどのように構造化されているかを解明する必要がある。
- ③ 「学力不振」「登校拒否」「非行」「いじめ」については、当事者およびとりまく人々の問題への認知が、具体的にどのように構造化されているかを分析するのが有効である。
- ④ 青年や高齢者の「孤独感」「疎外感」は、個人にとってだけでなく、社会にとっても重要な問題である。臨床的実践には、特定個人の構造解明が不可欠である。
- ⑤ 障害（病）者の「障害（疾病）の認知と受容」、終末医療での「死の受容」などについては、本人やとりまく人々の認知構造が問題となる。
- ⑥ 近年、とくに高齢者を介護する者の「介護ストレス」が問題視されている。上記①とも関連するが、介護者個々人の認知構造を分析することが必要である。
- ⑦ 病気の発症や治療に深く関わるのが家族であり、本人の治療だけでなく、家族関係の改善を必要とすることが多い。そこで構成員の「家族への態度」の構造分析が有効となる。
- ⑧ 集団療法は文字通り集団状況での治療であるから、治療者（ファシリテーター）や参加者の「対人行動の認知」や「治療集団に対する認知」が問題となる。
- ⑨ 患者が治療者に対してまた治療者との関係についてどのように認知しているのか、逆に治療者が患者をまた患者との関係をどのように認知しているのか、の「治療的人間関係」の構造分析は、臨床にとって重要な課題である。
- ⑩ 治療者が診断・評価を試みる際に、意識的、意図的に患者情報を分析するのが困難なとき、治療者自身が行う「情報の構造分析」として有用である。
- ⑪ 患者個々人が施設をどのように捉えているかが、来所可能性や治療意欲に影響をあたえる。そこで「施設への認知」を検討することが要請される。
- ⑫ 心理テストを含めて、各種検査やその実施状況をどのように認知しているかを分析することが望まれる。「検査への認知」次第で不安が生じたり、検査結果とか治療意欲に影響をあたえるからである。投薬や手術などの「処置・治療への認知」についても同様である。

2) 産業心理学

企業の内外の人々が、企業や職場、生産物や商品などをどのように認知しているかが産業心理学において重要な意味をもつことは、いうまでもない。具体的なテーマとしては、以下のようなものがあげられる。

- ① 社員の「企業イメージ」の測定への利用。特定部門の役職者、生産性の低いあるいは高い典型社員の認知構造の分析ができる。支店（工場）間の差異を比較することも可能である。外部者についても、地域のリーダーなどの分析が可能。例えば、原子力発電所へのイメージなどが考えられる。
- ② 管理監督者を対象として、現在の職場の物理的環境、人間環境、風土などの問題構造を分析できる。これを「職場の診断」や職場の改善に活用する。
- ③ 管理監督者が「理想とする職場イメージ」の構造を分析する。多くの管理監督者のスキーマを分析することで、一般性の高い職場の理想イメージをあきらかにできる。また、部署や経歴による違いを検討したり、個々人による差異も分析できる。

- ④ 管理監督者が自分の職場でどのように働きかけるべきであると認知しているかの構造を調査する。この管理監督者の「職場介入スキーマ」についても、上記③と同様に分析することが可能である。
- ⑤ 「職務分析」「工程管理」「生産システム」や「賃金制度」「異動（昇進を含む）制度」について、担当者や一般社員の認知構造を検討するときに使える。
- ⑥ 「商品イメージ」について、社員や消費者の認知がどのようなものかを、質的に具体的に分析する。「開発商品のイメージ」「包装イメージ」「コマーシャルのイメージ」の分析にも有効である。
- ⑦ 「ライフ・スタイル」「心理的サイフ」などを、質的に分析するときに活用できる。とくに具体的な項目間の関連や構造の分析に威力を発揮する。また、個性的で主観的な構造を、被験者の解釈を踏まえることで生き生きと了解できる。
- ⑧ 実体を捉えにくい接客態度、販売方法、アフタケアのような「サービス・イメージ」のソフト構造を具体的かつ質的に分析でき、実践や改善に有効である。
- ⑨ 具体的な問題解決を通して適性診断や能力開発ができるので、「教育訓練」や「自己啓発」に利用できる。

3) 教育心理学

療育に関する部分は臨床心理学のところでも触れているので、ここではそれ以外のテーマをとりあげる。

- ① 教師による「個別学級集団のイメージ」を構造分析することで、特定学級に独自な問題構造を診断し介入することができる。
- ② 教師が学級内で最も好ましいと感じる生徒と最も好ましくないと感じる生徒についての認知構造を比較する。この教師による「生徒認知」のギャップと生徒のモラル等との関係を分析する。
- ③ 教師による「生徒への働きかけと関係認知」をPAC分析する。これによって学級全体としてや特定の生徒との、生徒-教師関係の認知構造がわかる。また、成績優秀者と不振者、望ましい行動の生徒と望ましくない行動の生徒を比較することで、どのような差別的関与をしているかを分析できる。
- ④ 教師にとっての「理想の学級イメージ」を構造分析する。教師の理想学級のスキーマを多数数で分析すれば普遍性をあきらかにできる。また、年代や経験による違いを検討することも、個別教師による差異を分析することもできる。
- ⑤ 教師は学級にどのような働きかけをすべきかについての認知構造を調査する。教師の「学級介入スキーマ」についても、④と同様に分析することが可能である。
- ⑥ 孤立した生徒、学業不振の生徒、行動問題をもつ生徒などを対象として、「学級イメージ」の構造分析をする。これによって現実の問題や生徒の認知の歪みを検討できる。
- ⑦ 生徒を対象として、「教師からの働きかけと関係認知」をPAC分析する。とくに孤立した生徒、学業不振の生徒、行動問題をもつ生徒の分析は有用である。
- ⑧ 学級は4月の編成から次第に発達していく。教師の「学級発達のスキーマ」について、④⑤と同様に分析できる。
- ⑨ 上記の①～⑧に関しては、小・中・高およびそれぞれにおける学年で異なるといえよ

う。これらの「学校・学年水準間の比較検討」が必要である。

- ⑩ 「概念の理解」、「道徳判断」、「性意識」など、発達により質的な変化が生じるさまざまなテーマの研究に利用できる。
- ⑪ 学校、学年、学級、教科指導、生徒指導の問題についての教師の認知を検討することで、教師本人の診断をすることが可能である。「教育訓練」や「自己啓発」に活用できる。

4) 社会心理学

態度の基礎的研究についてはすでに詳述したので、ここでは応用的なテーマについて言及する。

- ① 同一の連想刺激によって生じたアクセス（連想）項目が被験者間でどのように異なるかに注目することで、暗黙裡のパーソナリティ理論のような個人特有の「対人認知構造」を分析できる。
- ② 「コミュニケーション行動の構造分析」ができる。例えば、話者の非言語行動（表情、身振り、しぐさ、声）と言語行動（話の内容）のどこに注目し、各要素がイメージの上でどのように関連づけられているのかを分析できる。
- ③ 偏見をもつ対象への個人独自の認知構造を検討する。とくに偏見対象群へのアクセス項目がどのように構造化されているのかを分析する。これによって「個人の偏見構造」をあきらかにできる。
- ④ 「アクセス項目の構造的複雑度と説得への抵抗」を分析できる。もう少し具体的にいえば、対象についてアクセスされた項目の構造の複雑さによって、その対象に関連する説得への抵抗がどのように違うかを検討することが可能である。
- ⑤ 「対人関係の発展と対人認知の構造的変容」の検討ができる。具体的には、親密化の進行、長期間の継続的關係によって、相手への認知や関係の認知がどのように変化するかを分析することが可能である。
- ⑥ 「リーダーの集団認知」「フォロアーのリーダー認知」「フォロアーの集団認知」「リーダーによるフォロアーとの関係認知」「フォロアーによるリーダーとの関係認知」「リーダーおよびフォロアーの集団規範認知」などを分析することで、リーダーシップや集団過程の研究に貢献できる。
- ⑦ 「内集団のイメージ」「外集団のイメージ」「内集団と外集団の関係認知」をとりあげることによって、社会的カテゴリー化の形成・変容過程を具体的に検討することができる。
- ⑧ 特定個人の、「重複成員性」「役割葛藤」「準拠集団」「アイデンティティ」について、質的かつ構造的に分析できる。また、それらについての集団間比較も可能である。
- ⑨ 特定の社会的対象や事象について、個人や集団がどのように認知しているかの構造を質的に分析できる。例えばエイズのような社会的問題において、「特定社会対象（事象）の認知構造」の分析を行うことができる。
- ⑩ 研究者が、特定の社会事象や社会的行動に関与する諸要因を直感してはいるが、それらの構造を意識的・意図的に分析できないとき、「情報の構造分析」をするために利用できる。

5) その他の領域・分野

その他の領域と分野については、IV節の個人別態度構造分析の意義の「3 その他の領域・分野への応用」の部分で、ある程度言及してきた。当面は既述の範囲を越えて拡張する必要もないので、省略する。

(2) 連想刺激の研究

II節の「(1)刺激語の決定」のところで述べたように、PAC分析では刺激語の良否が連想内容の質を決定する。そこで、連想刺激(語)自体の研究も重要となる。

- ① 入手したい連想内容に最も適合する刺激として、まずどの種類を選ぶべきかが問題となってくる。刺激語、図版、ビデオ、実物などから、ふさわしいものを選択しなければならない。一例をあげるならば、被験者の自己についてのイメージを間接的に測定するのなら、TATのような投影法的な刺激を用いることになろう。そこで、それぞれの種類はどのような連想反応を生じやすいかを研究する必要があるということになる。年齢、性別、知能などによる適合性も検討課題である。また、文章などで直接的にイメージさせる方法と、投影法の図版などで間接的に測定した場合の違いについて、外的基準とも対応させながら検討することが要請される。
- ② 上記①の選択後には、具体的にどんな連想項目を手に入れたいかに合わせて、刺激の内容をつめなければならない。例えば、家族全体への包括的なイメージなのか、構成員についての項目も欲しいのか、父親や母親などの特定の人物に対するイメージに限定するのかによって、連想語となる文章などの内容や表現が違ってくる。この点に関する研究も必要になってくる。
- ③ 上記①②の研究成果を基に、どのような属性をもった人にどのような連想項目を反応させるのに有効であるかの「連想刺激一覧表」を作成することが、実用上の要請課題となってくる。

(3) 外的基準による検討

PAC分析で得られた構造の質的分析、各種の測度による量的分析の結果については、最終的には外的基準によって妥当性が確認されることが望まれる。以下に、内的基準に関連するものも含めて、検討課題をあげよう。

- ① 質的分析のそれぞれの内容や量的分析のそれぞれの測度が、診断・予測や効果判定にどれほど有効であったかを検討する。
- ② 可能な部分については、他の技法で得られた結果と比較することで妥当性を吟味する。
- ③ どれほど多くの関連研究を刺激したあるいはしつつあるかも、間接的な有効性のチェックになる。この基準での評価の高さで著名なのは、Freudが提唱した精神分析である。
- ④ 内的基準に関連するものであるが、個を分析するPAC分析ならではの妥当性に関する独特な指標のひとつは、それぞれの個人(集団)間で結果の質的内容が異質である程高いという点である。この異質性に関しても検討しておくことが望まれる。

(4) 複数回答への対処

集団には複数の構成員がいるので、個別集団のPAC分析では複数の人を対象として実施

することができる。これらの複数回答をどのように扱うかが問題である。対処の方法としては以下のようなものが考えられ、必要に応じて選択することになる。分析すべき内容によっての方法が妥当であるかを検討、研究する必要がある。

- ① 集団構成員の話し合いによって1つの反応にまとめる。わかりやすいアナロジーとしてあげられるのは、集団で行うKJ法である。
- ② 集団のキーパーソンの回答だけに絞る。集団に強力な影響力をもち集団に関する情報を最も包括的に所有する、学級担任であるとか、リーダーであるような人物の回答を代表性のあるものとみなす。
- ③ 核家族のように構成員が少数の場合には、まとめないで並列的に分析し比較する。大きな集団でも、典型者を選べば同様の分析・解釈法となる。
- ④ 集団の回答をなんらかの方法で平均化する。あるいは出現頻度の高いパターンの回答を選び、代表とみなす。
- ⑤ 集団内での一致度、ばらつき度そのものに着目し、質的内容や量的測度の各部分について計算する。
- ⑥ 複数の回答のパターンに注目し、類型化する。分析結果のカードを研究者の判断だけで分類する方法と、数的処理を行ってから分類する方法がある。

2 技法の改善と開発

現段階でもPAC分析はある程度の水準に達しており、このままでも十分に利用できる。しかし、制約を緩くするための改善や新たな技法を加えることができるならば、その適用範囲は飛躍的に拡大することになる。ここでは、アクセス項目数が大量となる場合について、年齢や知的水準の低い被験者にも適用できるようにするための技法の開発の2点についてとりあげる。

(1) 大量反応の処理

アクセス（連想）される項目数が増えると、項目の対が膨大化してくる。これによって被験者の類似度判定回数が肥大化し、被験者の労力と所用時間は相当なものになる。これを防ぐためには、どのようにして組織的に欠損値のままでよい部分を作り出すかである。どんな方法があるのか、どの程度の欠損なら許されるのかの基準について、今のところ考案もできていない。しかしながら、いずれは乗り越えられるべき課題である。

(2) 幼児用の技法開発

3, 4歳程度の幼児にも適用できる技法が開発されるならば、幼児・児童のイメージ構造を操作的・数量的に解明できることになる。これによって発達心理学に多大の貢献をすることができよう。是非とも開発が要請される。こちらに関しては、すでに考案したものがある。ほんの少しの手続きをつめれば、実証研究に着手できる。以下に要点を列記する。

① 連想刺激および連想項目

3歳以上なら概念を用いた自由連想もある程度可能である。しかし、遊戯室で好きな玩具を選ばせるというように、対象児の興味・関心をあらかじめ調べて、絵や写真などを提示して選択させるのも有効であろう（この場合の順位は、連想ではなく選択となる）。被験児の関心内容を十分に吟味してから項目を決定するのであれば、選択させなくてもよい。

② 重要順位

好きなあるいは嫌いなカードや品物を第1位から順番に抜き取る。残ったものから次の順位を選ばせて、抜き取る。（幼児にとって、肯定・否定に関わりなく重要順位を判定させるとか、いきなり全項目の順位を判断させるのは困難である。）

③ 類似距離

項目間の類似距離を評定させるには、3つの項目のうちよりイメージの近い2つを選択させる。逆に離れた方の1つを選択させる方法もある。操作的に近い方の項目間を0点とし遠い方の組をそれぞれ1点とし、最終的に各項目対の合計点を算出し、距離行列を作成する。（それぞれの組合せが直交すると仮定して、合計点の平方根を距離得点とする方がよいかも知れない。実験データによる検討が必要である。但し、合計前の距離の粗点については、[0]か[1]であり、2乗しても同じとなるので変更なし。）

④ その他の手続き

以下の手続きは成人用と同じとする。但し、結果の解釈については、絵や品物を用いる場合には、それらをデンドログラムと同じ順に並べてから、併合された群のイメージを聞く。これは、幼児にとって解釈イメージを引き出すのが容易なことによる。

以上は考案の段階にすぎないので、実施するとき幼児の特徴に合わせてさらに改良や工夫をすることになろう。

あ と が き

多くの研究者の助言や示唆、励ましに支えられながら、ようやくしてここまでたどりついた。5名の方には誤字・脱字だらけの草稿まで読んで頂いた。被験者として実験に協力してくれた学生たちのことも忘れられない。衷心より謝意を表したい。この論文が多くの研究者の評価に値するものであることを、個へのアプローチとPAC分析の技法が発展していくことを祈念しながら、擱筆としたい。

引 用 文 献

- オールポート, G.W. 大場安則訳 1970 心理科学における個人的記録の利用法 培風館 (Allport, G. W. 1942 The use of personal documents in psychological science.)
- 木下富雄 1968 (1)実験的立場から 南 博・木下富雄・南条正明・鮎戸 弘 社会心理学の研究法 (第8回日本社会心理学会大会シンポジウム) 社会不安の社会心理学 年報社会心理学第9号, 272-273.
- 水島恵一 イメージ心理学 人間性心理学体系第9巻 大日本図書

- 内藤哲雄 1991a 個人別態度構造の分析：過去・現在・将来での重要項目による 日本心理学会第55回大会発表論文集，732.
- 内藤哲雄 1991b 同性・異性への好意と嫌悪 日本社会心理学会第32回大会発表論文集，98-101.
- 内藤哲雄 1991c 教育社会心理学の展望 教育心理学年報第30集，73-82.
- 内藤哲雄 1992a 家族への事例的態度構造分析 日本心理学会第56回大会発表論文集，234.
- 内藤哲雄 1992b 学級風土の事例記述的構造分析 日本教育心理学会第34回総会発表論文集，270.
- 内藤哲雄 1992c 政党への個人別態度構造の分析 日本社会心理学会第33回大会発表論文集，254-257.
- 内藤哲雄・田中祐次・天根哲治・蘭 千壽・藤田英典 1992 個別学級集団へのアプローチ（準備委員会企画シンポジウム） 日本教育心理学会第34回総会発表論文集，S10-S13.
- 斎藤幸一郎 1976 人間心理学序説：意識の科学への新しい道 協同出版
- 高木廣文・佐伯圭一郎・中井里史 1989 HALBAUによるデータ解析入門 現代数学社